

島根で学んだ地域演出

地域を元気にする3つのキーワード



中村 文

空間演出プロデューサー

【なかむら あや】1980年岡山市生まれ。島根大学在学中、学生のチャレンジショップ「おかげ庵」を立ち上げ運営。卒業後、ふるさと島根定住財団にて地域づくりを担当。“空間演出”をテーマに、岡山のうらじゃ、松江の武者行列、東京にて「夢（ドリーム）プラン・プレゼンテーション」など祭りの企画・運営を行う。NPO 法人 Gassho 理事、島根大学法文学部同窓会理事

島根という街を知る

初めて島根に来たのは、大学入試のとき。二月の寒々とした空気、曇天の空。ここには来たくないなあというのが正直な感想でした。

四月、私は島根にきていました。入学した大学の周りには、生活に必要なものが買い揃えられるお店がそろっています。そこで働いているのは同じ大学生のアルバイト。友人のほとんどは大学から五分の場所に住んでいます。学校と部活動とアルバイトという大学生生活は、大学の周辺ですべて完結してしまいます。

島根に来ていながらも、“島根”を感じたり、“島根”に触れ合ったりすることなく大学生生活を送っていました。

大学二年の春、構内にある経済コーズ専攻者用の掲示板に目が止まりました。

「商人見習い始めませんか？」

学問としての「経済」には興味がないが、何か珍しい体験ならしてみたという好奇心からか、実家が自営業だったせいか、何となくそのフレーズにひかれ、説明会に参加をしました。

松江市の駅前中心地にある「天神町商店街」。おじいちゃんおばあちゃんが若かった頃には映画館もあり、おしゃれをして遊びに行く、華やかだった商店街。そして、時代の流れとともに空き店舗や後継者不足などの問題を抱えている商店街。この日本中に蔓延している「中心市街地の空洞化・活性化」を現場で学ぶために、実際に空き店舗

を使って、お店を運営してみようという課外活動の説明会でした。

説明があつたその場で、商店街の活性化をめざしてどんなお店をつくつたらよいか、話し合いが行われ、漏れなくそこにいたメンバーは全員、強引に学生のチャレンジショップの立ち上げメンバーとなりました。

二カ月後の夏祭りの日にオープンをするために、店舗運営の準備をはじめました。どんなお店をつくるかというマーケティングのために、商店街のお店を一軒一軒まわり、ヒアリングをし、アンケートをとりました。面倒くさそうに「忙しいから！」と追い払われることもありました。保守的といわれる“島根”を感じました。

二カ月後オープンした島根大学チャ



チャレンジショップ「おかげ庵」オープンの様子

レンジショップ「おかげ庵」は、地域で販売をしてみたい人向けのテナントショップとしてオープンしました。「活性化には、人が流動的に商店街を訪れることが必要」という結論から、お店のスペースを貸して、たくさんの方をもらった人にも使ってもらおう形態をとりました。

お店が形になってきて、毎月の歩行者天国「天神市」では何かしらの露店を出して、学生自身も楽しんでいて、徐々に商店街の人たちとの交流が生まれました。

夏祭りで神輿や太鼓に参加をしたり、商工会や青年会議所が主催する行

事に参加したり、地域の高齢者の方とお花見に行ったり、「島根の人」に触れ合うことが多くなりました。

友達といえば、同年代ばかりだったのですが、様々な年代の友達ができること、勉強になることばかり。これは、中心市街地の活性化にもうひとつ重要なキーワード「世代間交流」だと実感しました。

最初は保守的だと感じていた商店街の人たちとも、ひとたび仲良くなれば、家族のようによくしてくださいます。地元の人から聞く話を通じて、また島根の魅力を知り、街が好きになりました。

街を好きになる

大学周辺から、商店街に飛び出したことで見えてきた「島根」という街。入試のときは来たくないと思っていた街も知れば知るほど好きになり、大学を卒業後は、島根県の外郭団体である、ふるさと島根定住財団で、地域づくりの担当として働くことになりました。

地域づくりの担当者として、県内の地域を元気にしようとして活動されている様々な団体の方とお会いしました。担当者として、何が自分にできるかを考えたときに、「学生と地域」というキーワードがうかびました。学生時代に島根にふれあい、様々な年代の人と友達

になって知らない街の魅力を教えてもらい、街がすきになりました。そうして島根に住みたい、島根で働きたいと思うようになりました。島根の大学に來ている学生の多くは県外の出身者です。社会人になる前に、数年の時間を、せっかく過ごすのであれば、地域に出てほしいという思いがありました。そこで、学生と地域をつなぐ企画を行いました。大学の外にある社会で、そこに住む人々と学生とが友達になれるような共通体験をすると、必ずと言っていいほど、学生は島根を好きになってくれました。

好きなことを通じて友達になる

大学時代は、チャレンジショップの他にラクロス部に所属をしていました。このラクロスというスポーツは「Lacrosse Makes Friends」という理念のスポーツです。県外で試合がある際は、会場のある街の大学生の家にホームステイをするなど、この理念と私が思う、地域づくりとは「Friends（友達）」という部分で通ずるものがありました。そこで、ラクロスというスポーツを通じて、大学生と街とをつなげるプロジェクトを立ち上げました。大学生が



松江をラクロスの街にしようプロジェクト～公民館での様子～

ラクロスの伝道士となり、公民館・企業・行政・学校に出向き、友達になるツールとしてラクロスを教えました。中学校の体育の授業にも採用され、大学生が中学校で授業を行いました。年代の違う中学生に「教える」ということは社会に出る前の大学生にとって様々な発見があったようです。自分の好きなことで街に関わる。このことが岡山でのラクロス国際親善試合や、カンボジアでラクロスの道具からつくることに今、つながっています。

知り、好きになり、動く

二年間、勤務した財団を退職し、実家のある岡山市に戻りました。もつと世の中の役に立つための経験を積みたいとの思いはあったものの、何をしたいかはわからずにいました。そこで三カ月で五〇人の人と自分のやりたいうことについて話をするという目標を掲げました。二カ月でその目標を達成したときに、お話をした中のある人のご紹介で、「うらじゃ」ということで一三年の祭りの事務局をすることになりました。地域づくりからは少し離れてみたいという気持ちではあったものの、五〇人の人と話をする中で、地域に出た話、その中でも神輿・太鼓・ラクロスといった祭りを通じた活動の話をするときの自分の顔がいちばん輝い

ていたのではないかと思いました。

うらじゃは、岡山にある桃太郎伝説の鬼のモデルとなった「温羅」という人物をモチーフにした、踊りとメイクの祭りです。温羅は吉備の国に、製鉄や塩作りなどを伝え、国の発展に寄与した人物。桃太郎の方が有名ではありますが、岡山の歴史を紐解くと桃太郎だけではない岡山が見えてきます。このうらじゃは踊りを踊るための祭りではありません。

明確な理念があります。それは、『うらじゃを通じて、岡山を知り、岡山を好きになり、岡山のために動ける人を育てる』という理念です。

これは、私が今まで地域づくりを行う際に思っていた考え方です。チャレンジショップにしても、神輿や太鼓にしても、ラクロスにしても、そうした



うらじゃ（市役所筋パレード）



松江の天神太鼓に参加（著者中央）

場や人を通じて、その地域を知って好きになるところから、人々の気持ちちが、「自分」から「街」という視点になります。そこから行動が生まれ、活動となり、地域が元気になっていきます。

見本・信頼・支援

このうらじゃでも、岡山の学生と地域をつなげたいなと考えました。学生で踊り連をつくったメンバーや、学園祭実行委員のメンバーが少しずつうらじゃをつくる裏方に入ってきてくれました。うらじゃでは、学生がうまく地域に溶け込んだモデルができています。その成功の秘訣は、大人たちの姿勢にあります。

全国の地域で活動する学生と話をし、全国で共通する悩みがあります。それは「使われている」と感じてしまうこ

とです。元気のいい学生の力を求めすぎて、あまり知らない人から「若い人の斬新なアイデアを」と言われることに疑問を感じてしまいます。

うらじやの大人たちは、「私たちは若い人がどんなことを考えているのかわからないから、教えてほしい」とまずは自分たちが困っていることをさらけだしてくれました。そして、仕事の仕方は背中で見せてくれます。それも本当に楽しみながら。そして、その背中を見たときに初めて「ここでこんなことしてみたい」というものが湧き出てきます。そのときに大人たちは「やってみたらいい！責任は私たちがとるから」。

どんな活動も見本・信頼・支援がなければいけない。その循環が生まれたときに本当に強いチームができていくことをうらじやで学びました。

うらじやには毎年、学生スタッフが増え続けています。そして、夏の岡山の帰る場所として、イベントから祭り、そして文化へと発展しています。

地元・岡山に帰って、自分が島根でやりたかったことが見えてきました。

ものづくりが生む信頼・活気

二夏のうらじやの事務局員を経て、私は縁あって、京都造形芸術大学の空間演出デザイン研究センターの職員と

して、再び島根県松江市に帰ることになりました。

松江では、二〇〇七年より五年間、松江開府四〇〇年祭が執り行われます。そのオープニングを飾るのが、「武者行列」。松江開府の祖と言われる、堀尾三代が、桜咲く松江城に帰ってくる様子を市民が演じる武者行列です。これまでも数回行われてきた武者行列ですが、この年から、レンタルの鎧甲冑の衣装だけでなく、甲冑を市民が手作りすることも行いました。

京都造形芸術大学は、芸術を社会に役立てることを理念としています。その中で、市民が主役となる武者行列は、市民の祭りに行きたいとの思いがありました。私に松江に帰る縁をくださったこの大学の太野木啓人教授は常々、「空間演出はものづくりだ」とおっしゃっています。半年間、毎



武者行列の様子

週末、甲冑づくりのワークショップを行いました。このワークショップには一七歳〜八二歳までの方が参加。二〇

名の参加者募集に対し、延べ七〇名近くの人が甲冑づくりに関わってくれました。最初はみんな黙々と自分の甲冑を制作するだけだったが、だんだんと教えあい、助け合うようになっていきます。年代を超えて、自分が得意なことを誰かに教える。自分が苦手なことは誰かに助けてもらう。そんなチームワークができていきます。その中に、工作が好きだけで、行列には興味がないと言っていた三人のおじいちゃんに参加者がいました。甲冑づくりでリーダーシップを発揮し、ついに武者行列がはじまったときには、各隊のリーダーとして二〇〇名近い参加者の中心になっていました。

自分たちでつくった甲冑を誇らしげ



甲冑作りの様子



松江ほど着物のにあう都はないプロジェクト
～武者行列当日の様子～

に着て、闊歩された姿に、ものづくりが持つ、人をつなげる力、そこに生まれる活気を実感しました。

テーマは足元にある

この武者行列の事務局を行いなから、私は育ててもらった松江に、何か自分なりの恩返しはできないかと考えていました。松江には駅前には大きな橋が四本あります。その中の一本、松江大橋という風情ある橋を武者行列がとあります。その橋を見ながら、「武者たちが行列してお城に帰っていく姿を、街の人々が着物で迎えたらおもしろいな」と思いました。

松江はお茶文化のある城下町。松江の人の自宅を訪問すると、必ず、お抹茶とお菓子ができます。そして、たんすには着物がたくさん眠っていると聞いたことがあります。そこで、武者行列のある日は、家に眠っている着物を着て街へ出かけよう、そして着物を着てでかける日を増やして、街の風景をつくろうという企画を、松江開府四〇〇年祭に持って行きました。企画がとおり、着物が好きな友人を集め、「松江ほど着物のにあう都はないプロジェクト」を立ち上げました。

まずは、武者行列の日に着物で出かけようということを目標に、着物パスポート（着物ででかけると特典がある

お店をまとめた冊子）を制作するなどしました。パスポートの制作の際に、各商工団体の上からトップダウンで働きかけるのではなく、自分たちが好きなお店を一軒一軒まわり、直接対話をし、企画に理解をもらうことにこだわりました。私たちがやりたいことを本心に理解して、協力してもらうことが活動が街に根付くために必要な要素だと思つたからです。

甲冑づくりでも手作りすることが人の心を動かしたように、汗をかくことが「ホンモノ」をつくっていきます。

武者行列の当日、目標の三〇〇人を超えて、一〇〇〇人もの人々が武者たちを出迎えてくれました。

着物は誰もが「いいなあ」と思うものであり、松江の文化に根差したものであったからこそ、たくさんの方が共感して下さったのだと思います。

その後、市議会が着物で開かれたりと、祭りの日の着物が、松江の日常に根付いていっています。

島根でやりたいことを実現する

大学時代に、島根県が主催する「しまね起業家スクール」に参加しました。ここで出会った人たちと「しまねでやりたいことを実現する」ということをテーマに、産業振興・企業支援のNPOを設立しました。現在では、島根県

と提携して、OBである私たちが「しまね起業家スクール」を運営しています。メンバーは行政で働く人、起業家、大学の先生など様々です。街を元気にしたい。「何もないから…」と諦めるのではなく、ここ島根で、やりたいことを実現できたら日本中に元気を与えられると考え、自分たちのできるころから起業の支援を行っています。

地域を演出する

これまでの地域での活動を振り返ると、私の中の地域を元気にする方法は三つのキーワードがあります。

1. 若者・学生が街を好きになること
2. 一緒につくる

3. テーマとなるものは足元にあるもの
地域づくりは新しいものを輸入してくることよりも、その土地に昔からあるものを演出することでみんなが参加しやすくなります。その演出をする際に欠かせないのが新しい視点。それが若者であり、学生が楽しめるかどうか。そして、それをみんなでつくってみることで、大切なことが見えてきます。何も無い街などありません。つまらない街でも、日常でもおもしろいことは足元にあります。足元にあるものを自分でつくりしてみると楽しめる。こうした楽しむ気持ちですが、日常と街を元気にするのだと思います。